

この時期にしては真夏のような暑さが続くかと思えば、梅雨期で湿度も高く不快な日々が続く中、見る映画にことごとくガッカリさせられるのは何ともやりきれない気持ちが募るものです。まさに、躓き出したら止まらない状況なのです。

その先頭はまず、小澤啓一『メロドラマ』（1988 日活）です。原作は村松友視、脚本は高田純。小澤啓一（1933~）といえば、日活の終焉を飾る時期に渡哲也の『大幹部 無頼』（1968）でデヴュウを飾った日活アクションの再生を託された監督でもありました。1956年に日活に入社後、川島雄三、井上梅次、舛田利雄といった名監督の助監督として活動し、特に舛田利雄という骨太のアクションを中心に据えたドラマメーカーからの影響を強く受けた人です。1988年といえば、『となりのトトロ』（宮崎駿）が登場した年であり、また外国映画では『ラストエンペラー』（ベルナルト・ベルトリッチ）『フルメタル・ジャケット』（スタンリー・キューブリック）『ベルリン・天使の詩』（ヴィム・ヴェンダース）が公開され、日本映画は外国映画の勢いに押され、全般的に寂しさを感じる年でした。本作は「日活」が「につかつ」になり、また「日活」として制作・配給を開始したときの作品ですが、映画としての魅力が大きく欠落していることに唾然とさせられます。それは、TVのプログラムと変わらない内容と映像に過ぎないからです。ということは映画としての魅力に欠けるということを意味し、大スクリーンで見るとの映像美も構成もストーリーの展開もないということを指します。放火・強盗犯として15年という時効を迎える最後の10日間を描くにしては、緊張感に乏しく人間関係の表面的な描写に終始するのは非常に残念です。小澤啓一は、こうした映画作品よりは、後にその手腕を発揮する「太陽にほえろ」「大都会」「西部警察」といったTVドラマを評価すべき人であるのかもしれませんが。そこには、日活というか熱い想いで映画制作に関わっていた良き日本映画界の残滓を感じるからです。

次に挙げるのは、後藤幸一『正午なり』（1978）です。後藤幸一（1946~）は黒木和雄に師事し本作が監督としてのデヴュウ作に当たります。ATG作品と封切り当時は思っていたのですが、今回筆者の見たヴァージョンでは配給は東宝でした。丸山健二の原作、福地泡介の脚色で、新人俳優である金田賢一の主演です。（金田賢一は昭和の名ピッチャー金田正一の子息）長野の片田舎の高校を卒業し東京へ就職した青年が、田舎に戻って来たところからストーリーは始まりますが、電気製品の修理の仕事にありつき、とにかく寡黙に過ごします。東京で何があったのかも知らされず、田舎に残り農業に従事する同級生との交流を中心に話は続きますが、波乱はあるにしろ人間描写が曖昧な脚本と相俟って、新人金田賢一の稚拙な演技は作品を一層難解な世界へと導きます。結局は、性的欲求を満たすため衝動的な行動に出て取り返しのつかない状況を作り出した青年の無様な姿を映し出しただけの作品に終わりました。映画作品には最低でも何らかのメッセージ性なり主張があって当然だと思うのですが、それを無視した作品はその意味を失くしてしまいます。残念なことです。

アメリカ映画からも一本。J・C・チャンダー『アメリカン・ドリーム』（2014）、邦題には「理想の代償」と副題が付きます。1981年ごろのレーガン政権下の、どう見ても疲弊した経済状況の中で大型の投資を行いビジネスの拡大を図ろうとする若き石油会社の経営者を描きます。彼の会社は元々、妻の父親が興した会社であり、妻は経理を担当する立場にありまさに会社の金庫番を務めます。大型投資はニューヨークあたりの

港湾地帯の土地を購入し、そこに大型石油備蓄施設を建設し効率の良い受入、精製、備蓄、運送の体制を築き上げることです。土地の契約を済ませたものの、1ヶ月後の決済を控え業界内部からの嫌がらせが大々的に発生し、銀行からは融資不可の連絡を受け資金集めに奔走するハメに陥ります。出る杭は打たれる式の業界内のハラスメントが原因です。主人公オスカー・アイザックは、どうにか資金を調達する見込みができたものの、今度は検察が不正ビジネスの摘発に動きます。不正取引、脱税は当たり前といった前提のビジネスの実態が浮き上がります。オスカー・アイザックはあくまで正当なビジネスを貫くつもりですが、それでも金庫番の妻と共に帳簿類の隠匿を進めます。実は、妻による脱税等により莫大な隠し財産があることが妻の口から判明します。だったらその資金を最初から充てれば良かったのではないかと思ってしまうのですが。一部だか全般なのかは分かりませんが、アメリカでは強奪と脱税により隠し財産を膨らませ私利私欲を満たし、そこから再投資を行い更なる利益を発生させるという行動により、アメリカン・ドリームを実現させるという構図が浮かび上がってきます。また、業界特有の閉鎖的世界や検察機能（権力機能）との癒着も示唆されます。アメリカ映画の特徴の一つとして、不正の実態を暴き、本来のアメリカの正義と自由を実現させようとするところがあります。アメリカン・ドリームは必ず実現できるものとして、起業家・企業家にとっての活力源でもあります。しかし、こうした作品の作り手は、得てしてこういうことはイケマセンネとばかりに正義を振りかざし、拳句は自らの行為の健全性と優越性を訴えるという傾向があるように見受けられてしまうのです。まさにマッチポンプとでもいうものです。ですから、本作のラストでの移民の従業員による自殺行為はまったくの茶番にしか見えてこないのです。

荒井晴彦・森達也・白石和彌・井上淳一といった現代の日本映画界を代表する映画人たちによる「映画評論家への逆襲」（小学館新書）という大変参考になる一冊があります。この中で、脚本家で映画監督で、はたまた「映画芸術」発行人兼編集長の荒井晴彦（1947～）は、「普通は映画評に脚本は出てこないわけだよ。新藤兼人さんとか橋本忍さんとか有名な人は別だよ。何で脚本家に触れないのかと追求すると、字数もあるし、脚本家やスタッフの仕事は監督に代表させていると言い訳するけどね。（中略）脚本家になってショックだったのは、『Mr. ジレンマン 色情狂い』（1979 小沼勝監督）の時かな、”キネ旬”の評で、このセリフがいかにも小沼勝監督らしいセリフだとか書いてある。「おいおい、俺が書いてんだよ、それは」みたいなさ。（中略）全部、監督の手柄にするっていうのは、その方が書きやすいのかな」とあります。

今回不満を述べた3本の作品に共通して言える著者が行き着いたのは脚本の弱さなのです。荒井晴彦の脚本（この人の場合、原作モノからの脚色作品が多いといのも一つの特徴ですが、それはまた機会を改めて）は、常に人間の根源的な部分への洞察と想像力、そして赤裸々な人間の姿の暴露、人間性の解放が作品ごとに的確に描かれているところに最大の凄みとよさがあるのです。聖人君子的な人間を厳かに描くのではなく、市井の人間の弱さ、強かさ、狡さ、嘘の世界を堂々と描くことによるリアルな世界の展望が可能になるのです。荒井晴彦という人の恐るべき創作意欲は、原稿用紙4,700枚もの大西巨人作「神聖喜劇」を3,300枚のシナリオに、そして850枚までに削ぎ落とし完成させたことから明白です。映画化となれば12時間を超えるというこの脚本が実際に映画化されることはおそくないでしょう。しかし、実際読んでみると、ここでも戦時下のしかも軍隊という特殊な環境の中での多彩な人間模様が克明に描かれ、一気に読み進めさせる魔力が存在しているのです。シナリオの力たるや測り知れない威力を具え、作品の成否を決定する最大の要素とも言えるものです。シナリオ単体でお読みになることをお勧めする理由はそこにあるのです。